



Title	楚地新出土文献へのいざない（二）：武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著『郭店楚墓竹書』（『楚地出土戦国簡冊合集（一）』）
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2012, 54, p. 79-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

楚地新出土文献へのいざない（一一）

—武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著
『郭店楚墓竹書』（『楚地出土戦国簡冊合集（一）』）—

草野友子

一、『楚地出土戦国簡冊合集』刊行の経緯

一九五〇年代以降、先秦の楚の地にあたる湖北省・河南省・湖南省において戦国時代の竹簡が次々に発見されている。その件数は三十を超えて、総文字は十萬字以上、その内容は、卜筮・喪葬記録、司法・行政文書、思想文献、数術に関する文献など多岐にわたる。これにより、出土文献の研究が盛んに行われるようになり、中国学研究の進展に大きな影響を与えることとなる。

こうした状況を受け、出土文献に関する専門の研究機関が相次いで設立されるようになつた。中でも、その主

導的立場に立つてゐるのが陳偉教授を中心とする武漢大学簡帛研究中心である。湖北省の省都にある武漢大学は、地の利を活かして研究を推進し、学術交流、国際学会の開催、研究書および研究誌『簡帛』の刊行など、積極的に活動を行つてきた。また、二〇〇五年にはインターネット上において「簡帛網」(<http://www.bsm.org.gov>) の運営が開始された。自らが情報の発信源となり、かつ研究発表の場を提供しているもので、現在でも続々と研究成果が発表されている。

こうした中、二〇一一年十一月より、『楚地出土戦国簡冊合集』のシリーズ刊行が始まつた。本書は、二〇〇三年に開始された中国国家教育部哲学社会科学研究重大

課題攻関項目「楚簡綜合整理与研究」の成果を収載したものである。これに関連するものとして、すでに『楚地出土戰國簡冊「十四種』』（陳偉等著、経済科学出版社、二〇〇九年八月）が刊行されている。この書との関連も含めて、本書が刊行されるまでの経過を述べておきたい。

二〇〇二年から二〇〇三年、教育学部人文社会科学研究基地重大項目「戰國楚簡綜合整理与研究」の期間中に竹簡の写真の収集が行われた。その際、湖北省博物館所有の赤外線撮影用のカメラ（九十年代に生産）を使用し、湖北省博物館・考古所所蔵のいくつかの竹簡が撮影されたが、あまり大きな成果は得られなかつた。その後、日本の早稲田大学より提供された新型赤外線カメラによって、望山簡・九店簡・曹家崗簡・曾侯乙簡のすべて、長台闕簡の大部分、および包山簡の約半数の撮影が行われたところ、多大な成果が得られた。同時に、以前に撮影された各種図像資料が蒐集され、中国社会科学院考古研究所『考古』編集部が見つけた『長沙発掘報告』編集時（一九五〇年代）の五里牌簡の工作用写真、文物出版社が見つけた『信陽楚墓』（一九八〇年代出版）に使用された長台闕簡の写真、河南省考古研究所資料室にて見つかった一部のフィルム、包山簡の写真とファイル

ム、郭店楚簡の二種の写真とネガフィルム、さらに文物出版社の字帖用の部分的なカラー写真、曾侯乙簡の写真二種、および仰天湖簡・楊家湾簡のフィルムを入手することができ、夕陽坡簡については新たに撮影された。また、これらの竹簡に関するデータ（竹簡の簡長・幅・契口位置など）が可能な限り測量・記録された。このように、研究計画の段階で、十四種すべてに対しても最良の図像資料やデータが得られたため、整理・研究の基盤が固められることとなつた。

二〇〇四年末、整理・研究の段階に入り、二〇〇七年夏に『楚地出土戰國簡冊合集』（全竹簡の図録・釋文・完整的の注釈を含む）の初稿が完成した。そして、二〇〇七年八月から二〇〇八年三月にかけて、『楚地出土戰國簡冊合集』の原稿をベースに、項目の最終成果として『楚地出土戰國簡冊「十四種』』が編集された。この書には竹簡の写真図版が含まれておらず、注釈についても多くの基本的な結論を記すのみにとどまり、分析や例証部分は割愛された。これらの原稿は二〇〇八年に専門家の審査を通過し、その際に出された意見に基づいて、『楚地出土戰國簡冊「十四種』』と『楚地出土戰國簡冊合集』の原稿について一度全面的な照合・修訂が行われた。『楚地出土戰國簡冊「十四種』』については、筆者は以

前、「楚地新出土文献へのいざない」——陳偉等著『楚地出土戦国簡冊合集』の第
一輯として、『郭店楚墓竹書』が刊行されることとなつたのである。

二〇一〇年十月)において紹介したが、今一度、この書の概要を簡潔に述べておこう。『楚地出土戦国簡冊「十四種』』は、楚地出土の十四種三千五百枚以上の竹簡、

約五万字を対象とした大著である。十四種とは、包山二号墓・郭店一号墓・望山一号墓・望山二号墓・九店五号墓・九店六二一号墓・曹家崗五号墓・曾侯乙墓・長台閔一号墓・葛陵一号墓・五里牌四〇六号墓・仰天湖二五号墓・楊家湾六号墓・夕陽坡二号墓を指し、これら十四種の解説・釈読・注釈が掲載されている。本書の特色としては、竹簡の精密な釈読が行われていること、国内外の大量の文献を参考にして釈読に反映させていること、可能な限り竹簡の写真や現物にあたり、また赤外線撮影により不鮮明な文字を確認しているため、多くの新解釈を提示していること、所属不明となっていた竹簡残片にも注目し、それらを含めて竹簡の分類・排列を再検討していることなどが挙げられる。

一九九三年、中国湖北省荊門市の郭店一号楚墓において、大量の竹簡が発見された。墓葬年代は、墓葬形態や出土器物から推測して、「戦国中期偏晩」すなわち前世紀中葉から三世紀の初めと推定された。墓主は、同時に出土した漆耳杯に「東宮之師(もしくは杯)」の文字が認められることから、楚の「士」と推測されており、生前に典籍の収藏と精読を好んでいたのではないかと考えられている。

内容は、道家系文献と儒家系文献とであり、十八種に分類される。道家系文献は、『老子』甲・乙・丙と『太一生水』であり、また『語叢四』の遊説の術を述べている箇所は道家の陰謀家に属するとの説も提示されている。儒家系文献は、『緇衣』『魯穆公問子思』『窮達以時』『五行』『唐虞之道』『忠信之道』『成之間之』『尊德義』『性自命出』『六德』『語叢一』『語叢二』『語叢三』である。その中の大多数が佚書であり、保存状態も良好である。

二、『郭店楚墓竹書』の構成

ることから、学術的価値は非常に高く、古文字学、古文

献学、先秦思想史、先秦学術史の研究に大きな影響を与えることとなつた。

その後、解説・整理を経て、一九九八年五月に荊門市

博物館編『郭店楚墓竹簡』（文物出版社）として竹簡の写真図版および釈文・注釈が公開された。また、同年十

月に刊行された崔仁義『荊門郭店楚簡〈老子〉研究』

（科学出版社）は、『老子』『太一生水』の写真図版と崔

氏による釈文・注釈を収録し、写真図版は『郭店楚墓竹

簡』とは別に撮影されたものが使用されている。さら

に、龍永芳氏は、竹簡の保護・整理作業中に一枚の未公

開の新簡が発見されたことを発表した（湖北荊門発現

一枚遺漏簡的「郭店楚簡」）、『中国文物報』、二〇〇二年

五月三日）。また、二〇〇二年十月には、「簡帛書法選」

（文物出版社）のシリーズが刊行された。研究成果につ

いては、中国国内外問わず、膨大な数の論文・著書が発

表されている。

では、本書の内訳を知るために、目次を掲げてみよう。

『郭店楚墓竹書』

（楚地出土戦国簡冊合集（一））、武漢大学簡帛研究中心・荊門市博物館編著、陳偉・彭浩主編、李天虹・彭

浩・龍永芳・劉祖信撰著、文物出版社、二〇一一年十一月、A4、三二七頁、横組繁体字、二八〇〇元）

目次

序言

凡例

前言

老子

（甲・乙・丙）

十三

語叢

一

語叢

二

語叢

十四

語叢

二

語叢

三

語叢

三

語叢

四

語叢

四

語叢

五

語叢

五

語叢

六

語叢

六

語叢

七

語叢

七

語叢

八

語叢

八

語叢

九

語叢

九

語叢

十

語叢

十

語叢

十一

語叢

十一

語叢

十二

語叢

十二

語叢

十三

語叢

十三

語叢

十四

語叢

十四

語叢

十五

語叢

十五

語叢

十六

語叢

十六

語叢

十七

語叢

十七

語叢

十八

語叢

十八

語叢

十九

語叢

十九

語叢

二十

語叢

二十

語叢

二十一

語叢

二十一

語叢

二十二

語叢

二十二

語叢

二十三

語叢

二十三

語叢

二十四

語叢

二十四

語叢

二十五

語叢

二十五

語叢

二十六

語叢

二十六

語叢

二十七

語叢

二十七

語叢

二十八

語叢

二十八

語叢

二十九

語叢

二十九

語叢

三十

語叢

三十

語叢

三十一

語叢

三十一

語叢

三十二

語叢

三十二

語叢

三十三

語叢

三十三

語叢

三十四

語叢

三十四

語叢

三十五

語叢

三十五

語叢

三十六

語叢

三十六

語叢

三十七

語叢

三十七

語叢

三十八

語叢

三十八

語叢

三十九

語叢

三十九

語叢

四十

語叢

じめに文献の基礎情報を明示している。具体的には、竹簡の枚数・形制（簡長・契口の位置・編綫の数など）といった書誌情報や、文献の性質や時代性、竹簡の排列の問題などについてである。そしてその後に、「釈文」「注釈」が掲載されている。

「釈文」は、竹簡に記された文字をもとに隸定したものを記し、（ ）内に釈読した文字を記載している。『老子』甲本を例に挙げると、

匱（絶）智弃支（辨），^{〔1〕}民利百怀（倍）。匱（絶）攷（巧）弃利，^{〔2〕}覗（盜）惻（賊）亡又（有），^{〔3〕}匱（絶）憲（僞）弃慮，^{〔4〕}民复（復）季子。^{〔5〕}……

〔1〕匱，整理者：絶。字也寫作“匱”。《說文》古

文“絕”字與簡文略同。

智，整理者讀作“知”。

絶智，魏啓鵬（1999B，209頁）抛棄

智慧。

支，整理者釋爲“下”，讀爲“辯”。裘按：當是“鞭”的古文。“辯”“鞭”音近，故可通用。

……

といった形式である。文字は、通行字体を使用し、通行字体にないものについては字形から隸定が行われている。隸定を行うこと 자체が困難な場合は、その文字の画像が掲載されている。文字に関する凡例は以下の通り。

・異体字・仮借字を通行字体にしている場合は（ ）内に。

・誤字を正確な文字に改めている場合は（ ）内に。

・残っている筆画と文意によつて文字が確定できる場合は【 】内に。また、文意や他の文献によつて適切に欠文を補うことができる場合も、【 】内に記載する。筆画が鮮明ではない、あるいは残欠して判読できない文字は、□で表示。残欠部分の文字数が確定できない場合は、……で表示。

・竹簡が残欠している場合は、□表示。

・脱字・衍字については、釈文ではそのまま掲載し、注釈の中で説明している。

文字の確定は、二〇一〇年の定稿直前までに発表された学術雑誌、研究書、論文集、「簡帛網」(<http://www.bsm.org.cn/>)掲載論文など国内外の大量の文献を参考にしており、その詳細は、「注釈」に記載されている。

「注釈」では、まず整理者（原釈文・原考釈とも言う）による釈文・注釈を引用し、それに対しても異説がある場合には、それぞれの説が引用されている。異説は、これまでに提示されているすべての説が逐一挙げられているのではなく、妥当と思われるものを抽出している。また、提示されている異説は、卷末の「主要参考文献」と対応している（右の例で言うと、魏啓鵬氏の1999年の論文が引用されている）。同一年に複数の論文がある場合は、発表が早いものからA・B・Cと記号が付されている。

本書の特徴としては、まず、新資料の発見による文字の再検討が行われていることが挙げられる。例えば、郭店楚簡『六德』第二十二簡の「以奉」の下の合文は、「社稷」の二字ではないかとの推測が提示されていたが、それを確定しうる論拠が薄弱であつた。しかし、上博楚簡『姑成家父』第三簡に見える「社稷」の二字と、郭店楚簡『六德』第二十二簡の合文とを比較検討した結果、「社稷」とするのが確定的となつた。また、郭店楚簡『老子』甲本・第一簡の「慮」の字についても、諸説紛々であったが、上博楚簡『三德』の原釈文において、「且」の字が「慮」と釈讀できることが示されていたため、「慮」と認定する説が妥当であることが証明された。

さらに、郭店楚簡『太一生水』第十簡「青昏其名」の「青昏」については、原釈文では「請問」と釈讀されたが、その後、「青昏」とは天地の「名」であり、馬王堆帛書『却穀食氣』にみえる天地六氣と関係があるのではないかとの推測がなされていた。しかし、上博楚簡『季康子問孔子』第二簡に「青昏」を「請問」に釈讀できる例があり、原釈文の解釈が妥当であることが判明した。このように、郭店楚簡の文字認定の際に、上博楚簡の研究成果が有力な手がかりとなつていている。

また、原釈文の竹簡の綴合や排列についても、重要な指摘がなされている。例えば、「竹簡残片」について、以下のような案が提示されている。

- ・「竹簡残片」第二十簡は、『老子』乙本の第十簡の後ろに綴合。
- ・『五行』第十九簡は竹簡の上段が残欠しているが、字形や筆画を対比した結果、二字分のみしか残つていなければ、「竹簡残片」第二十一簡が、実は十九簡の残片であつたことが判明。
- ・「竹簡残片」第八簡は『語叢二』第七十六簡と第七十七簡の間に排列。

このように、本書においては最新の研究成果が反映されている。

では、本書と『楚地出土戰國簡冊「十四種」』所収の「郭店楚墓竹書」とは具体的にどのような点が異なるのかを見ておこう。

一つは、竹簡の写真図版が全て掲載されている点である。

本書の写真図版には『郭店楚墓竹簡』の写真が採用されており、遺漏簡や竹簡の背面の写真については、武漢大学簡帛研究中心と荊門市博物館の協力によって撮影されたものが掲載されている。

『楚地出土戰國簡冊「十四種」』では収録されなかつた竹簡の写真図版が収載されたことにより、釈文と竹簡の写真図版とを対照して文字を確認することが容易にできるようになった。写真図版はカラーではなく白黒ではあるものの、『郭店楚墓竹簡』のものよりも鮮明に印刷されているように見受けられる。

また、写真図版は本書で採用されている竹簡の排列順に並び替えられているため、釈讀部分との照合が可能である。「竹簡残片」については、前述の三つの残片（第八簡・第二十簡・第二十一簡）は、それぞれ所属すると考えられる文献に排列されている。その他の残片について

ては、字形から推測するに、多くが『語叢一』『語叢二』『語叢三』のものであろう、という見解が示されている。遺漏簡については、『語叢三』の第十六簡の後ろに排列されており、「從所少好、與所少樂、員（損）」の九文字が補われている。

竹簡の背面の写真が挿入されているものは、『五行』第三十六簡（「解（懈）」の文字）、『成之聞之』第十三簡（「七十二」の文字）、『尊德義』第十一篇（「百八」の文字）、第二十八簡（「百」の文字）、第十二簡（「百四」の文字）、第十五簡（「百一」の文字）である。数字については、その竹簡の点数を記載したものではないかという説などが提示されている（陳劍「郭店簡〈尊德義〉和〈成之聞之〉的簡背数字与其簡序關係的考察」、『簡帛』第二輯、上海古籍出版社、二〇〇七年十一月）。

もう一つは、『楚地出土戰國簡冊「十四種」』では割愛された解説や注釈などが収録され、より詳細なものとなつている点である。

例えば『老子』の場合、年代と文献の性質についてすでに議論になつていて、それについては諸説の概要を説明している。

注釈については、一定程度にとどまつていたものが、数行にわたつて深く考察されているなど、大幅に増加さ

れている。参考までに、注釈数を以下に示しておく（『楚地出土戦国簡冊「十四種』』→『楚地出土戦国簡冊合集』の順）。

『老子』 甲（一一〇→一二二）・乙（四六→五〇）・丙（二七→二七）、『太一生水』（一三一→二七）、『緇衣』（一二〇→一二九）、『魯穆公問子思』（七→八）、『窮達以時』（三三→三七）、『五行』（一〇五→一四）、『唐虞之道』（六五→七九）、『忠信之道』（二六→二三）、『成之聞之』（八〇→九八）、『尊德義』（八九→一二七）、『性自命出』上（九三→一二二）・下（六〇→九五）、『六德』（七六→一〇八）、『語叢一』（七一→一〇四）、『語叢二』（五一→七〇）、『語叢三』（五七→七三）、『語叢四』（五六→五四）。なお、『忠信之道』『語叢四』のように注釈の数が『楚地出土戦国簡冊「十四種」』に比べて少なくなっているものもあるが、文字考証はより詳細なものが掲載されている。

三、本書の意義

最後に、本書の意義について述べておこう。

郭店楚簡の発見から十九年、公開からは十四年の月日が流れている。その間、発表された論文、刊行された論

著は数え切れない。そうした中、早くから出土文献研究の推進を促してきた武漢大学が研究成果を集約し、発表したことには大きな意義がある。郭店楚簡の研究成果が一目でわかる本書は、原釈文と共に必携の書となるであろう。

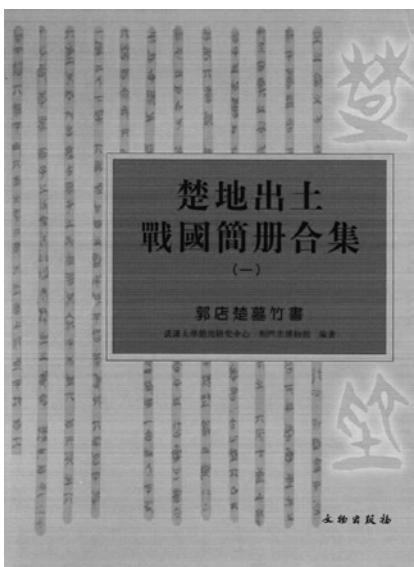
ただし、本書によつて各文献の諸々の問題が全て解決しているわけではない。むしろ、郭店楚簡を今一度再考していくことの重要性を提示しているともいえる。現在、郭店楚簡とほぼ同時代の思想系の文献として、上博楚簡（上海博物館藏戦国楚竹書）や、清華簡（清华大学藏竹簡）などの出土文献の公開が進んでいる。また、今後公開予定のものとしては、北京大学が所蔵する前漢時代の『老子』も注目される。これは馬王堆帛書・郭店楚簡につぐ第三の『老子』古本であり、これまで最も保存状態が良く、ほぼ完整した漢代の古本であることから、今後の『老子』研究において有力な資料になるとされている。こうした資料の公開を受けて、郭店楚簡を再度検討する際、本書は非常に有効であり、研究の進展に寄与するものとなるであろう。

また、参考文献に挙げられているものを見ると、日本人研究者による論文は甚だ少なく、そのほとんどが中国語に翻訳されているものであることに気づく。こうした

状況は、研究成果を中国語に翻訳し、中国の学術誌などに投稿することの重要性、海外に向けて発信することの必要性を考えさせられる契機ともなる。

新たな竹簡群が続々と発見されている今日、蓄積された研究を振り返ることの重要性を提示し、また今後の研究の進展にも大きな役割を果たす本書は、非常に重要な意義を備えている。

『楚地出土戦国簡冊合集』シリーズの刊行は、今始まつたばかりである。これから引き続き、他の十三種の文献が続々と刊行されるであろう。これにより、楚地、楚文化に対する研究がより活性化することは間違いない。



〔付記1〕 本稿執筆の経緯を述べておくと、筆者は二〇一一年十
月より武漢大学簡帛研究中心の訪問学者として在外研究を
開始し、陳偉教授をはじめとする先生方にご教示いただいた
いる。そうした中、本書にいち早く触れる機会を得、本稿を
執筆することとなつた。武漢大学簡帛研究中心の関係者各位
には心より御礼申し上げたい。

〔付記2〕 本稿は、平成二十三年度日本学術振興会・科学
研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。